

夢が叶うという不思議な体験

堀 治喜

コピライター

新年早々、過ぎた年のことを書くのもおかしな話ですが、昨年（1990年）の8月末、僕はある不思議な生命の誕生に立ち会いました。それは、胸が熱くなるほど感動的な時間でした。大地の鼓動と共鳴したような、あるいは宇宙のリズムと融けあったような、いいしれぬ喜びがからだの芯から湧いてくるのを感じたのです。

僕は、数年前から何人かの仲間と、じぶんたちの野球場をつくっていました。1990年に封切られた映画「フィールド・オブ・ドリームス」を観て感動した僕は、その余韻を胸のうちに仕舞っておくだけでは満足せず、みずから行動に移してしまったのです。「おまえがつくれば、彼はやってくる」という“あの声”を信じて、農夫がトウモロコシ畑をつぶして野球場をつくってしまったように、僕は“あの映画の声”に促されるようにグラウンドづくりをはじめてしまったのです。

「フィールド・オブ・ドリームス」に感動したのは僕達ばかりではないでしょう。グラウンドをつくりはじめた当初、アメリカはもちろん、日本のどこかで同じように大地に夢を刻印している連中がきつといるにちがいないと想像していました。実際には、こんな粹狂なことをしていたのは、僕達以外にはほとんどいなかったことを後で知のですが、その理由も今はわかるような気がします。野球場を“個人的に持つ”という夢は、夢のままにしておくのがもっともふさわしいほど非現実的であると同時に、大変なリスクを伴っていたからです。

土地は、広島市内から1時間あまりの郊外にお借りでしたが、それぞれ仕事を持っている僕達には、日曜日に通って何時間かの作業ができるだけ。しばらくは、草刈りや石拾いを気休め程度

にやるばかりで、ここがグラウンドになるという実感すら持てないような有様でした。ほとんど結果がでない焦燥感もあって、僕達はグラウンドを9月3日（じぶんたちが勝手に決めた「草野球の日」）までに完成させると公言し、その年の春から本腰を入れて作業に入りました。

まず、排水のためのパイプを埋設し、大きな石を掘り出し、トンボで真砂土を均し、外野のフェンスとなるトウモロコシを育て、その外周に柵を巡らせ、グラウンドの芝の種を蒔きました。梅雨の雨の中、夏の炎天の下、時間と競争するようなプレッシャーと闘いながら、それこそ頭が真っ白になるほど過酷な作業をつづけたのです。

その甲斐あって、お盆のころには外野のトウモロコシもすくすくと成長し、グラウンドの芝は緑の羊毛のように生えはじめ、ようやく球場らしい姿になってきました。

そんなある日の黄昏、作業を終えた僕達が、グラウンドを見下ろす高台に設置したばかりの「DREAM FIELD」の看板ごしに球場を眺めていたとき、その不思議な感覚に襲われたのです。黒い雲の輪郭を残光で黄金色に照らしながら夕陽は駆け足で沈んでゆき、あたりは薄暮から闇に変わろうとしていました。すでに肉眼ではあたりの景色を読み取ることは難しくなっていました。眼下にみんなが手塩にかけてつくってきたグラウンドが横たわっているのが、はっきり“見えた”のです。そして、深い闇の底から、すやすやと眠る赤子のようなかすかな息遣いが聞こえてくるではありませんか。僕は、突然に目頭が熱くなるような感動を覚えました。

その時、僕達の夢は、たしかな生命となって誕生していたのです。